

若者の性別役割意識と母性愛信奉における実態調査
—ステップファミリーに着目して—

甲斐 陽菜・齊藤 友子

Gender Role Consciousness and Belief in Maternal Love among Young People

KAI, Hina and SAITO, Tomoko

大分大学教育学部研究紀要 第46巻第2号

2025年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 46, No. 2, March 2025

OITA, JAPAN

若者の性別役割意識と母性愛信奉における実態調査

—ステップファミリーに着目して—

甲 斐 陽 菜*・齊 藤 友 子**

【要 旨】 若者世代の性別役割意識と母性愛信奉傾向について、教育学部の学生を対象とし 126 名に調査をし、回答を分析した。性別による役割の振り分けには否定的であるが、伝統的な性別役割意識と母性愛信奉傾向が強いことが解った。今後は、伝統的な性別役割意識と母性愛信奉傾向が与える課題を、当事者と非当事者の両方の側面で捉えていくことが必要である。

【キーワード】 ステップファミリー 母親役割 性別役割意識 母性愛信奉

I はじめに

1 研究背景

近年、児童虐待死事件においてステップファミリーが着目されている。ステップファミリーについて、小榮住(2020)¹⁾は、「『継ぐ(STEP)』と『家族(FAMILY)』からできた言葉で、継親子関係のある家族の呼称である」としている。また、厚生労働省(2013)²⁾は、「男女のどちらか或いは両方に子どもがいる状態で、男女が結婚(事実婚含む)してできた家族」、野沢・菊池(2021)³⁾は「親の一方あるいは双方の新しいパートナーとの関係を持つ子どものいる家族」と定義している。つまり、親の一方、もしくは双方と継親子関係のある子どもがいる世帯である。

ステップファミリーの特徴として小田切(2018)⁴⁾は、家族のメンバー全員が離別の体験をしていることや、親子関係が夫婦関係よりも歴史が長いという独自の特徴を持つ家庭であるとし、特にひとり親の男性が再婚する際、継母に対して子どもの母親役割を期待し、子育てや家事を全て任せてしまうことがあるとしている。また、水谷(2014)⁵⁾は継母への調査から、自分自身や周囲から期待される「母親役割」だけでなく、周囲から与えられる「固定的な性別役割分業観」や「母性愛信仰」もストレスになっていると指摘している。

ここで、母親の役割とは何かについて、日本における母親役割を定義した二川・長谷川(2014)⁶⁾は、「子どもの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げること」と定義づけている。また、及川(2014)⁷⁾は、「自己をどのように位置づけどのように行為すべきかという行為予測をもって育児行為をすることによって取得さ

令和 6 年 10 月 31 日受理

* かい・ひな 大分市役所 保育教諭

** さいとう・ともこ 大分大学教育学部生活・技術教育講座 (保育学)

れていくもの」としている。つまり、母親役割とは子育て期間において母親が自己を見つめ、成長のために葛藤することで得られるものといえる。

次に、「性別役割分業観」について内閣府男女共同参画局(2012)⁸⁾は、「男女を問わず個人の能力等によって役割の分担を決めることが適当であるにも関わらず、『男は仕事・女は家庭』『男性は主要な業務・女性は補助的業務』等のように、男性、女性という性別を理由として役割を分ける考え方のことである」としている。また西野(2015)⁹⁾は、「いわゆる『男は外、女は内』意識である」と定義している。換言すれば、男性は仕事、女性は家事というように男女を性別のみでその役割を分ける考え方や意識といえる。

ただし、家族観や性別役割分業観を巡る議論について、島(1999)¹⁰⁾は、「男は仕事、女は家庭」を否定する意識の増加が何を意味しているのかが明確でない点をあげ、この意味を正確にとらえなければ「男は仕事、女は家庭」が否定されるとし、女性の労働力化が進みつつも、女性に家庭内役割が課されたままの現状は、「揺らぎ」としか表現し得ないと指摘している。

一方で、「性別役割意識」は「母性愛信奉」という見方もできる。「母性愛信奉」について、江上(2005)¹¹⁾は、「母性」は「女性が母親として持っている性質、また母たるもの」、「母性愛」は「母親が持つ、子に対する先天的・本能的な愛情」であると理解されている」としている。また江上(2007)¹²⁾は、「母性愛」を信奉する傾向について、「社会文化的通念として存在する伝統的性別役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って育児を実践する傾向」としている。つまり「母性愛信奉」とは、女性は本能的に母性を持っていると考え信じることでありといえる。

更に、家庭内における「母性愛信奉」が与える影響について、江上(2013)¹³⁾は、母親と父親の双方の養育態度としている。具体的には、父親と母親では、親自身の子育てに対する積極性や、子どもとの関わり方に影響を与えており、双方の母性愛信奉傾向の違いが、子育てへの認識の違いや、夫婦満足度に影響をもたらすとしている¹³⁾。加えて、母親よりも父親の母性愛信奉傾向が高い場合、母親は父親から母親役割を過剰に期待されていると捉え、それによってストレスが生じ、結果的に子どもへの関わり方にも影響をもたらす可能性を指摘している。これらの先行研究から、「母性愛信奉傾向」は単に「母親や女性に本能的に備わる愛情」だけでなく、実際に人々の中でどのように信奉されているかによって、夫婦関係や子育て、ストレスに影響を与える側面があることが解る。

以上から、継母のストレス要因と指摘された「母親役割」や「性別役割意識」、「母性愛信奉」は、性差や結婚経験・子どもの有無に関わらず、人々の潜在的な意識であり、その意識の在り方が多様な生き方が当たり前となりつつある現代での「生きにくさ」に繋がるのではないかと考える。現代における「生きにくさ」は継母が周囲から「母親役割」を期待されることがストレスであったように当事者のみが抱える課題ではなく、当事者に向けられる眼差しも変えていくことで改善されるのではないかと考える。つまり、家庭を営む当事者だけではなく、非当事者の視点から捉えることも重要であると考えられる。

そこで、本研究では「母親役割」「(伝統的な)性別役割意識」「母性愛信奉」について、多様性が求められる時代に教育を受け、今後多様な生き方や家族形態を選択していくと考えられる若者に着目し、性別役割意識や母性愛信奉傾向の実態を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 方法

1 対象と調査手続き

本研究では、多様な教育について学んでいる A 大学教育学部の 1 年生から 3 年生を対象に、計 28 問のステップファミリー、母性愛信奉、性別役割意識に関する質問を設定し、ステップファミリーに対する認識や、性別役割意識や母性愛信奉に対してどのように感じているかを調査した。調査期間は、2022 年 10 月で、1 年生から 3 年生に Web 調査を実施し、126 名から回答を得られた。

2 質問紙の内容

質問紙は、回答者自身の家族構成と回答者が考える「ふつうの家族」の形態を明らかにするため、厚生労働省の国民生活基礎調査の調査項目¹⁴⁾を参考に「家族構成」と「一般的な家族形態」についての項目を設定した。また、ステップファミリーや、性別役割意識、母性愛信奉(質問紙では「母性愛信奉」を回答者が分かりやすい「母性愛信仰」として表記した)については、その認識を問うだけでなく、実際に回答者が当事者となった場合を想定できるよう、場面設定をした質問項目や、回答者自身の考えを明らかにするため自由記述の項目を設定することで、量的・質的の双方の観点から回答者の潜在意識を明らかにすることを試みた。調査項目は、大きく分類して①基本属性、②ステップファミリーに対する認識や回答者の考え、③性別役割意識に対する認識や回答者の考え、④母性愛信奉に対する認識や回答者の考えとし 4 つの領域に分類した。具体的な質問項目は、以下の通りである。

1) 基本属性

1 学年から 3 学年を対象とし、本調査では性別については問わず家族構成についての項目を設定した。

2) ステップファミリーに関する調査項目

質問回答は「一般的な「家族」の形態はどのようなものと考えてるか」、「血のつながりがないと愛情は生まれないと思うか」など 5 項目である。自由記述は「ステップファミリーについての印象について」、「血のつながりのない親の存在をどう思うか」など 6 項目である。

3) 性別役割意識に関する調査項目

項目回答は「家庭において父親、母親という性別によって担う役割が異なると思うか」「父親と母親ではどちらが子育てに向いていると思うか」など 4 項目である。自由記述は「離婚を決めた夫婦がいる。子どもは父親・母親のどちらと暮らしていく方がいいと思うか」に対する理由など 2 項目である。

4) 母性愛信奉に関する調査項目

項目回答は「子どもにより愛情をかけることができると思うのは父親・母親のどちらと思うか」、「母性があれば子どもをかわいがることができると思うか」の 2 項目である。自由記述は以上の 2 項目に対する理由など 2 項目である。

尚、2-4) の各調査項目については図 1 から図 11、表 2 を参照されたい。

3 分析方法

まず、学年によって性別役割意識と母性愛信奉傾向について差があるのか検討するため、一

元配置分散分析を行った。以上の統計解析には、統計解析パッケージ SPSS. 26.0 を用い、有意水準は 5%とした。

次に、質的な分析には、テキストマイニング「User Local AI テキストマイニング」を使用して分析した。特徴語を抽出するためのロジックとして、TF-IDF 法で統計処理をした。次に、単語の関連を考察するため、共起ネットワークを確認した。これは、出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画されている。

4 倫理的配慮

調査への協力は回答者の自由意思であり、同意が得られなくても何ら不利益を受ける事はないこと、得られた情報は、今回の調査目的以外には使用しないこと、また、web 上の質問項目には無記名で記載し、個人が特定されることがないことを質問紙にて保証した。以上の研究計画は、著者が所属する大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 R4-005)。開示する利益相反はなし。

Ⅲ 結果

1 対象者の概要

各学年の人数と家族構成は以下の通りである(表 1)。家族構成の選択項目は「父親・母親・継父・継母・姉・兄・妹・弟・義兄・義姉・義妹・義弟・祖父・祖母・その他」としており、回答者が「父親」「母親」を選択した場合を「初婚家族」、どちらか一方のみ選択の場合を「ひとり親家庭」、どちらも含まれていない場合を「両親はいない」としている。また、回答に「祖父」「祖母」が含まれている場合を「祖父母あり」としている。

表 1. 学年と家族構成

(n=126)

	カテゴリー	n	(%)
学年	1	39	(31.0)
	2	71	(56.3)
	3	16	(12.7)
家族構成	初婚家族	98	(77.8)
	ひとり親家庭	6	(4.8)
	父親と継母	2	(1.6)
	祖父母あり	17	(13.5)
	その他	3	(2.4)

2 性別役割分業意識

性別役割分業意識に関する項目の結果では、「家庭において父親、母親という性別によって担う役割が異なると思うか」について「異なると思わない」が最多であった(図 1)が、「父親と母親

4 学年と回答傾向との差

学年によって回答傾向に差があるのか、回答者の家族構成によって回答傾向に差があるかについて検討した。「父親と母親ではどちらが子育てに向いていると思うか」、「子どもにより愛情をかけることができると思うのは父親・母親のどちらと思うか」に有意な差が見られた(表2)。回答者の家族構成の回答傾向に有意な差は見られなかった。ただし、本調査では、交互作用についても検討していないため、本調査結果は参考までに留めるものとする。

表2. 学年と性別役割分業意識・母性愛信奉との差

質問項目	平均値			検定 ¹⁾
	1 学年 (n=39)	2 学年 (n=71)	3 学年 (n=16)	
⑤ステップファミリーという言葉 を聞いたことがあるか	1.33	1.49	2.70	n.s.
⑥ステップファミリーについて 知っているか	1.33	1.49	1.44	n.s.
⑨血のつながりがないと愛情は 生まれないと思うか	1.13	1.04	1.19	n.s.
⑬継父・継母がいる場合、家族関 係はどうなると思われるか	1.69	1.69	1.81	n.s.
⑰家庭において父親、母親という 性別によって担う役割が異なる と思うか	0.51	0.71	0.94	n.s.
⑳父親と母親ではどちらが子育 てに向いていると思うか	1.49	1.28	0.75	.036
㉒離婚を決めた夫婦がいる。子ど もは父親・母親のどちらと暮らし ていく方がいいと思われるか	1.82	1.76	1.88	n.s.
㉔継父・継母が保護者となる場 合、どちらが子どものいる家庭に 入る方が良いと思うか	1.72	1.73	1.50	n.s.
㉕子どもにより愛情をかけるこ とができると思うのは父親・母親 のどちらと思うか	1.74	1.63	1.00	.007
㉗母性があれば子どもをかわい がることができると思うか	0.74	1.04	0.81	n.s.

1) 一元配置分散分析

IV 考察

まず、性別役割意識についての結果から、回答者は性別による役割の振り分けには否定的であるが、一方で「子育て＝母親」という認識が高かった。また、父親と母親それぞれの家庭における役割は依然として、「父親＝稼ぐ役割であり、大黒柱的存在」であること、「母親＝家事・育児を担う役割」という伝統的な性別役割意識が高かった。この理由について、滋賀県男女共同参画審議会(2012)¹⁵⁾は、20歳代女性の「仕事と家庭を両立し、社会で活躍するためのお手本となるような人物」は「母親」が6割であり、こうしたロールモデルがいる女性の方が、固定的性別役割意識が低いとしている。つまり、若者世代の性別役割意識は親世代の仕事や家事、育児への向き合い方や意識が影響していることが解る。更に、内閣府政府広報室(2023)¹⁶⁾による『『男女共同参画社会に関する世論調査』の概要』では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に賛成(どちらかといえば賛成を含む)の割合は18～29歳は18.8%であるのに対し、40～49歳は28.0%、50～59歳は31.9%と親世代は高いことが解る。加えて、若者世代は「育児・介護・家事と両立しながら、妻が働き続けることは大変だと思うから」が最多であるのに対し、親世代は「妻が家庭を守った方が、子どもの成長などにとって良いと思うから」が最多となっている。つまり、今回の調査結果においても上記の研究結果と同様に、親世代の性別役割意識が影響していることが考えられる。親世代の子育ては母親が担う方が良いという伝統的な性別役割意識が強い傾向が見られ、親世代のこのような意識が、世代間で伝達され性別役割意識に影響していると考えられる。

次に、父親の役割については「家事」「育児」といった言葉も見られた。この背景には、厚生労働省が2010年から行っている男性の子育て参加や育児休業取得の促進等を目的とした「イクメンプロジェクト」¹⁷⁾の認知されていることが挙げられる。実際に、「令和5年度雇用均等基本調査の事業所調査」における「育児休業制度の利用状況」¹⁸⁾は、男性の育児休業者がいた事業所の割合は37.9%と令和4年度より13.7ポイント上昇している。また、総務省(2022)の「令和3年社会生活基本調査」¹⁹⁾では、6歳未満の子供を持つ世帯の夫は、2016年と比較して家事時間が13分、育児時間は16分増加していることが解る。

これらのことから、男性の「家事・育児」の認識が進んでいると考えられるが、その背景の1つとして、職場において会社や上司が率先して育児休業取得率を増加させることが、会社全体の社会的評価を向上させる新しい要素になったことが考えられる。また、これらの結果は本研究において「家事」「育児」という言葉が出現している要因の1つであることが推察されるが、これまで先行研究(岩下, 2011)²⁰⁾等で指摘されていた夫婦間やステップファミリー間における伝統的な性別役割意識が、非当事者である若者世代にも表れていることは特徴的である。これらを考え合わせると、若者の性別役割意識は、多様性や男女平等といった社会の流れを理解しながらも、個人の認識では伝統的な性別役割意識が大きいことが推察される。

更に、母性愛信奉傾向については、「子どもに愛情をかけられる存在＝母親」という認識が強いこと、また「母性」＝「子どもをかわいがることができる要素」とあるという認識があることが解る。これについて、テキストマイニングの結果からは出産経験に関連する言葉が出現しており、母親は痛い思いをする出産を経験しているからこそ、母性が自然と備わっているという「出産経験と母性の関連性の高さ」が解る。更に、同様に図11からは「包容」「寄り添える」といった言葉が出現しており、母親の持つ母性に対して包容力や子どもに寄り添うことのできる要素を

感じていることが推察される。このような母性に対するイメージが、子どもをかわいがることができると感じる一因であると考えられる。つまり、若者の母親像は愛情をかけられる存在であり、出産経験や「自然と母親に備わっている」とされる母性があることは、子どもをかわいがることのできる要素であるという認識が大きいことが推察される。

最後に、学年と回答傾向の比較では3年生の方が、伝統的な性別役割意識や母性愛信奉傾向が強かった。ただし、今回の調査では、学年と母性愛信奉との関連は行っていないので解釈には慎重にならざるを得ないが、他学年と比較して3学年は多様な教育課題を学習していることを踏まえると、より伝統的な認識が表れていることは注目すべき点である。この点から、教育課題や社会の流れを理解していても、根本的な個人の認識を変えていくことが困難であるのかもしれない。

以上の考察から、家庭科教育のみならず、家族・家庭生活を取り扱う保育に関する学習や家族関係に関する学習において核家族、初婚家庭等の家庭生活と家族をはじめ、母親や保育に関わる人たちの役割のみに焦点を当てるだけではなく、ステップファミリーやひとり親家庭など多様な家族の在り方があり、家族になることに困難さを抱える同性カップルの問題や周囲から家庭を持つことを期待されることへの葛藤などについて、家庭を営む当事者や非当事者それぞれの立場で捉えなおす必要がある。そのためには、学習者が当事者目線で伝統的な価値観も含めた家庭生活や役割について、社会の流れに沿って柔軟に且つ多角的に検討できる家族・家庭生活における役割意識に関する教材を開発することが望まれる。

V 結論

本研究において、学生には依然として伝統的な性別役割意識や母性愛信奉傾向があること、また出産経験が母性の獲得につながるという認識があることや、教育を重ねた学生の方がより伝統的な性別役割意識や母性愛信奉の傾向が示唆された。

本研究の限界は、学生の一部を対象にしたものでありサンプル数が限定されている為、社会人等を含めた若者の全体的な傾向を捉えることができない。

今後は、若者のサンプルを増やし、交互作用にも着目し長期に亘って調査を行うことが望ましい。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました、教育学部学生の皆様並びに先生方へ心より深く感謝申し上げます。

注

本稿において「若者」「若者世代」とは、子ども・若者育成支援推進法（厚生労働省）の規定に基づき策定された定義に基づいて²¹⁾ おおむね18歳から30歳未満までの者をさす。

参考文献

- 1) 小榮住まゆ子 わが国におけるステップファミリーの現状と子ども家庭福祉の課題—ソーシャルワークの視点から—, 椋山女学園大学人間関係学研究, 18, 2020.
- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課「子ども虐待対応の手引き(改正版), 2013.
- 3) 野沢慎司・菊池真理, ステップファミリー子どもから見た離婚・再婚, 角川新書, 東京, 2021, 76.
- 4) 小田切紀子 特集:夫婦 日本におけるステップファミリーの現状と課題, 家族療法研究 35(1), 2018, 37-40.
- 5) 水谷誉子 ステップファミリーの子育てにおける母親の役割とストレス, 心理臨床学研究, 32(2), 2014, 238-249.
- 6) 二川香里・長谷川ともみ 母親役割の概念分析, 富山大学看護学会誌 14(1), 2014, 1-11.
- 7) 及川留美 母親の役割取得における省察の構造化—子育てにおける語りに着目して—, 東京未来大学研究紀要, 7, 2014, 31-42.
- 8) 内閣府男女共同参画局 男性にとっての男女共同参画に関する意識調査報告書の概要, 2012.
- 9) 西野理子 性別役割分業意識の規定要因の推移, 東洋大学社会学部紀要, 2015, 139-147.
- 10) 島直子 性別役割分業を維持する意識構造—「愛情」イデオロギーの視点から—, 年報社会学論集, 1999(12), 1999, 26-37.
- 11) 江上園子 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全, 発達心理学研究, 16(2), 2005, 122-134.
- 12) 江上園子 “母性愛” 信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響—職業要因との関連—, 心理学研究, 78(2) 2007, 148-156.
- 13) 江上園子 「母性愛」信奉傾向が夫婦関係と養育態度に与える影響—父親と母親の「母性愛」信奉傾向の交互作用に着目して, 教育心理学研究, 61(2), 2013, 169-180.
- 14) 厚生労働省国民生活基礎調査「世帯表」, 2021.
- 15) 滋賀県男女共同参画審議会「若者の男女共同参画に関する意識についての検討結果」, 2012, 4-7.
- 16) 内閣府政府広報室, 男女共同参画社会に関する世論調査の概要, 2023, 19-22.
- 17) 厚生労働省 イクメンプロジェクト <https://ikumen-project.mhlw.go.jp/> (最終アクセス:2024.10.20)
- 18) 厚生労働省 令和5年度雇用均等基本調査, 2024.
- 19) 総務省 令和3年社会生活基本調査 生活時間及び生活行動に関する結果の要約, 2022.
- 20) 岩下好美 家庭役割と職業役割の調和—父親の家事・育児参加—, お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション PROCEEDINGS16, 2011, 13-22.
- 21) 厚生労働省 各種法令による児童等の年齢区分
file:///C:/Users/%E9%BD%8A%E8%97%A4/OneDrive/%E3%83%87%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%88%E3%83%83%E3%83%97/0000096703_1.pdf
 (最終アクセス:2024.12.25)

Gender Role Consciousness and Belief in Maternal Love among Young People

KAI, Hina and SAITO, Tomoko

Abstract

We surveyed 126 students at the Faculty of Education regarding gender role attitudes and beliefs about maternal love among young people, and analyzed their responses. The results showed that while they expressed negative views about assigning roles based on gender, they exhibited a strong inclination towards traditional gender roles and beliefs about maternal love. These findings are expected to serve as a foundation for future research. Moving forward, it will be essential to examine the challenges posed by traditional gender roles and beliefs about maternal love from the perspectives of both participants and non-participants.

【Key words】 step family, mother's role, gender role consciousness, belief in maternal love